

を究極の目的とはせず、より大きな構想を抱いておられようし、かかる基礎的作業を無視して砂上に楼閣を築くことは許されない。

博士の学風・学派の発展を壽ぎ、さらに執筆者と同様に博士の御健康を祈りつつ、筆を擱く。(昭和三十七年九月 吉川弘文館刊 A

5判 上巻六一二頁 一六〇〇円 下巻七一二頁 一九〇〇円) (上横手雅敬)

宮内庁書陵部編

圖書寮叢刊 政基公旅引付

私はまずこの史料を読んで、私が今までに見た限られた中世の日記のなかで、これほど面白い日記はないのではないかと思った。そして現地を踏査したいという衝動をとめることは出来なかった。そこで二回にわたり現地踏査を行った。昨年の初秋のことである。

第一日は日根野に慈眼院をたずねて古文書・古地図を拝見し、今はない無辺光院の址を探り、それから土丸城址を左に仰ぎながら、大木の谷に入る。そして会う人ごとに九条政基が起居していた長福寺を尋ねたが知る人はいない。中大木の禪寺・禪徳寺の門をたたき、ま

た古老の教をえて、長福寺という地名が僅かに残る水田の畦に立った。いわゆる入山田村の入口に当る。文龜三年七月、干魃のため飲料水尽きた村落民が、わずかに残っていた水を求めて押しかけた長福寺の井戸もない。古瓦が出るという。その水田の上に円満寺があり、今は老人達の寄合所である。それから入山田村四ヶ村の鎮守滝宮に詣る。今は延喜式神明帳にも記載のある火走神社が社名である。第二日は、政基が「しらひけをつたるて落る我あせや、七の宝の滝のいとすら」と詠んだ犬鳴山七宝滝寺に古蹟を探る。

このような現地踏査を経て、再びこの日記を読んだが、その時はもうこの日記から面白さが消えて、自然の大きさ強固さと、人間歴史のきびしさが残るだけであった。「政基公旅引付」はそのような内容の日記である。

前関白・准三宮九条政基が都をはなれ、六十才に及ぶ老骨にむちうって家領を護るためにこの山村に四年間住むことの異常さを軸として、父政基に「今日申刈女子出生、旅所為艱毎事省略、今之折節尤無益出生也、口遊殊有隙、可恥可恥」といわれながら生をうけねばならなかった女子の異常さや、母は離別

し、父も盗犯の罪により政基の断罪をうけ、残された一四才、六才、二才の農夫右馬正円の三人の子供が、孤独と飢餓のため山野を泣き歩く異常さ、守護方の捕虜となった百姓から、「どうか守護方の命令をうけ入れてわれわれが助命されるよう計ってほしい」との手紙をうけとった村民が「政基公がそれを許さない限り、我々の力ではどうにもならない。捕われたものは身の不運と諦め、村中のものを怨まないでほしい」と暗に村のために死ぬと返事し、事実そうだったであろう村落生活の異常さが、めぐりにめぐっている守護・国人・農民・根来衆・野伏らがそれぞれ個々にぎりぎりに生きる異状さのなかで、決定的に対立し、いつしか新しい歴史を生んでゆく流れを、政基は自からいみじくも「旅引付」と題して草しているが、まことに王朝貴族の最後の旅にふさわしい内容のものである。

政基公をして京都の能も及ばないと賛歎せしめた農民の念仏風流、紺灰生産とその商品化、佐野市場と市場商人、近郷の農民の關係、水利など多彩な内容を含んでいて、戦国時代における文化史・商業史さらには社会経済史などの貴重な史料を盛りこんでいる。この部

分に異常さはなく、その世界にだけ興味をもつのであれば、その時代について研究する人だけが読めばよいようにも思う。しかしこの日記はそれ以外の人々にも読んでほしいように思う。その理由は次のところにある。

『泉佐野市史』が本書を紹介し、さらに本書が刊行されることによって、日根野・入山田村の地域に今住んでいる人々は、九条政基の土にまみれた四年間の自分の土地での生活を知り、大患山大井堰慈眼院の称が、政基の法名に因んだことを知ったであろうが、それ以前、今から四六〇年程以前に、その地に展開した、かくも異常な出来事を伝える記録も伝承も持っていない。しかし私はこの忙却の中に、異常さの渦中にあった農民が、実に正常な抵抗を試みて、ついに勝つたのだという気がしてならなかった。もの云わぬ農民に耳を傾けてほしい。これが本書を沢山人に読んでもらいたい私の理由である。(A5版 二四二頁 昭和三十七年三月 養徳社発行 定価七五〇円) (三浦圭一)

京都大学近世物価史研究会著 一五～一七世紀における

物価変動の研究

——日本近世物価史研究 一——

社会の移行過程を明らかにすることは、どの時代社会をとっても決してやさしいものではないが、中世社会から近世社会にかけてもまた例外ではない。中世における複雑な社会のあり方は中世史研究の一つの重要な課題であるが、応仁の乱を起点とする一五世紀後半からは、複雑な社会が統合整理される方向を示しはじめる。この過程での貨幣経済の問題は重要な研究上での比重を与えるもので、さきに宝月圭吾教授によって公刊された『中世量制史の研究』では、とくに商業界を中心にその分析が試みられた。ここに京都大学近世物価史研究会が編述した『一五～一七世紀における物価変動の研究』は、小葉田淳教授の巻頭の解説「通貨と量・権衡について」で、宝月教授の前書を部分的に補いながら、この時代の通貨と量・衡について教えられるところが多い。

物価表は金・銀・銭・米からはじまって武器類や日用品でありながら表として意味をな

さないほどの頻度のないものを除いた衣食住に関する百以上に及ぶ主として京都での名目を、一四五一年(宝徳三)から一六五〇年(慶安三)にわたって表にしたものである。本書はその物価変動を知るうえ貴重な資料であるが、その利用はそれにとどまるものではない。その一つは、ここにとりあげられた品目は、その時代の一般的な商品を示すということである。またこの表を概観して、一五～一七世紀を次の三期にわけられるのではないかと思う。

Ⅰ期 応仁～文亀年間

Ⅱ期 天正～慶長年間

Ⅲ期 元和年間以後

すなわち、本書の物価表中、もっとも詳細なのは米であり、売値、買値、相場などの分類がしてあるが、Ⅰ期は主として銭で取引されⅡでは金銀取引が増加し、Ⅲ期では全く銀取引である。それ以外の商品でも、Ⅰ期が銭勘定、Ⅱ期が銀勘定であることに変わりはないが、Ⅰ期が米取引となるものが多く、野菜類・調味料・果実類・酒・茶・油・燃料・農具・衣料・紙など概してそうである。農村の副産物、山間海浜の特産物、及び都市での製造